

くぐもり声

馬場 駿

ていたかのように、ふわりと着地した。一瞬結晶が見えたような気がした。温かい俺の手が雪を——消した。今度は跡形も無く。水気さえ残さず。

一尺ぐらい積もった雪が黙もだしてしている。気が遠くなる程の数で、億兆の単位で結晶がここに集まっているのに。

『気が狂いそうに、静かだ』

何か突き刺してみようと思った。雪の似非えせお上品は醜い。里山の作業小屋だったらあるはずだと思い、半周したところで平スコを見つけた。手にとつて振り上げると、目の前の雪が避けて左右が盛り上がったように見えた。

『ありえない』と頭を強く左右に振った。次いで突き刺して雪の傷口を抉(こ)じる。すると、確かに、キュツと泣き声があった。裂け目の右側に泥が付いた。左側は赤茶の錆色に染まっている。

『汚い——悪かった』

雪に謝ると、何かに憑かれたように、ウインドヤツケ

苔生(こけむ)した広さ一平米程度の岩が目の前に横たわっていた。ただ一番上の部分は、絨毯のような感触とは程遠く、垂らした白ペンキが平らに広がったとしか言えないもので、岩肌の凹凸が掌にそのまま伝わってきた。しゃがんで微妙に違う白の境目をジッと見詰めてみると、淡い灰白色の何かが目の前を落ちていく。『え? もしかしたら』と、急いでピントを合わせると、紛れもない——雪。笑顔でもあげようと思っっているうちに、岩の白に吸い取られて、消えた白。小さな湿り気だけが、ぼっん。

もうひとひら降りてくる、きつと。

『見上げるな、空がバックだと雪の白が汚れる』

ゆっくりと左掌を差し出してみた。案の定、雪は待っ

の裾でスコップをこすり続けた。

二度目は滑るように雪に入った。平スコの柄を少し揺すってから引き抜く。目を見開き、ヒツと息を吸った。雪の裂け目がピユアな水色に染まっていたのだ。『何と澄みきったブルー……』

愛おしげに右手をさし伸ばし、蒼あおに触れようとしたそのとたん、雪が掌を挟んだ。親指だけが丸ごと雪の外で蠢(うごめ)いている。

慌てて反り返り、全身で右手を助けようとした。

……抜けた。

その瞬間、誰かの絶望的な絶叫が雪の山野に飢(こた)ました。誰かが自分だとは思いたくなかった。

親指以外の四指が雪に奪われていたのだ。

小屋を出て五十メートルほど雪中を歩行しただけで全身が汗みどろになった。

『なぜこんなに道が狭い』

雪を積んだ篠竹が重さに負けて、全員がお辞儀をしているからだ、すぐに気付いた。目の前の一人が耐え

かねて、頭の上の雪を振り落とす。曲がっていた背は真直ぐに伸び、勢い余って隣の背高な仲間を叩いた。

細かく分かれ飛び上がった雪が、風に乗ってやってくるのを、避(よ)けもせず顔で受ける。

——「これ長野じゃ美簗(みすず)っていうのよ」

急に京(みやこ)が頭の中で喋った。『美簗(みすず)の信濃の国の千曲川』。そこから先の歌詞は知らない。形のいい唇を自在に動かして、京は澄んだ声で唄った。

見惚れたときから先は、記憶が欠落している。

——気が付くと、篠竹が雪を振り落とす連鎖は、遙か彼方まで続いていた。飛散した雪の子らが景色を切り取って、霧の中へと誘(いざな)ってゆく。

『引き返そう。先が見えない』

踵を返す俺の目に、熱い涙が噴き出した。

『食い物なんて必要ないんだよ、バカが』

深さ一尺の雪の上を普通に歩ける。氷点下五度という気温が積もった雪を凍らせているからだ。

静けさにも音がある。暗く沈んだものを抱え込んで

いない人には聞こえない音だ。

夜空には無数の穴が開いている。心清らかな人たちはそれを星と呼ぶ。

『月も？ いや、月はどこまでも月だ』

しかしそれも太陽が出るまでの主役。空に間違つて居並ぶとき、月は恥じ入って赤くなるから。

不覚をとつて滑つた。

大事に持っていた便箋の束が氷の上を走る。

回る。冷たく固まった雪の上を。ジタバタして、イヤをして、グルグルと手を回して。

「燃やせ、未練の紙くずを」

誰かが言った。いや、自分だ、ごまかすな、俺自身だ。

『もう手に持つてるんだよ、偉そうに指図するんじゃないねえ』

ライターが光を、くれるんだ。心を縛り、絶望のどん底へと突き落とす、美しい文字からの開放を。

火がつくと、紙は黒ずんで縮み、紫煙を放つて、苦しみだす。爆発的な炎上はそのあとだ。自ら燃えることで宙に浮く。飛び立つのだ、手紙が。京みやこの香りが。優しさが。

手紙を重ねておいて横から火を放つ。

何枚も何枚も、燃えて飛ぶ、を繰り返す。舞っているのは紛れも無く紙の上の恋。

『よし、一緒に回ろう』、立ち上がって、『立ち上がつてだ！』

叫びながら、突つ伏して泣く。涙が止まらないのだ。

何が哀しいのか、俺自身が分からない。

白く冷たい雪と赤くて熱い炎の狭間に。いま、この真っ黒な景色の中に——独り、俺がいる。

急に腹が痛み出した。食糧が切れて二日目になる。登つてきた当日は昼、夜ともコンビニ弁当を食った。二日目と三日目はチビあんパン一個とウーロン茶のみ。食あたりをするほどのものを胃に入れていないのだから、考えられるのは「冷え」か心因性だ。

予想外のことだったが、幸いにも小屋には寝具があった。おそらく長期に亘る森林の下刈(したが)りか何かで、休息用においていったのだろう。捨ててもいいという感じで粗末なものだったが、氷点下で体温を保持

できるだけでも有り難かった。

午後になって熱も出てきた。それでも今のうちならまだ、歩ける。

近くの小さな沢に下りてタオルを濡らし、コツヘルに更新用の冷水も入れた。

『え、誰?』

ふっと人の気配を感じて、振り返った。

——「いまね、お魚がいた。小さな岩のところ」

膝に掌を当て川面を覗き込む京みやこの髪が、雑木林を潜くぐつてきた風に揺れている。

「山女やまめだな、だとすると、枯葉の塊かたまりの下に隠れてる」

「ほんど? 獲れたらいいね」

真直ぐに背を伸ばした京。その顔が、俺の数センチ先で微笑んだ。瞳(め)がきらきらと輝いている。

捷(した)う篠竹につかまって、右足を斜面に、左足を小岩に掛けて、両掌を、枯葉をつかむ形にして下ろしていく。

「逃げちゃうよ、そんなに近づいてえ」

「シート、山女は見つかりっこないって思ってるよ」

「うそばっか」と声を殺して、弾むように笑う京。

水に浸(つ)かった枯葉を丸(こ)と掬(す)く、高々と投げた。

「あー、お魚あ」

抜けるような秋の空をバックに、尾鱭(おびれ)を大きく振って山女が飛んだ。

——体中がゾクゾクして、思わず額に手を当てた。

『立ったままで夢かよ。熱のせいだな』

せせらぎが急に耳に響いた。どうやら嘲(わら)われているらしい。

下痢が始まった。トイレが無い小屋なので、入り口の扉の脇に雪を固めて和式の便器造った。もちろん困りも糞溜(ふん溜)めもない。

ろくなものを食べていないので水のような便しか出てこないが、一人前に体力の消耗は、一回(ごと)に激しさを増した。

食べ物も、薬も無い。看護してくれる者もいない。いや、俺がこの小屋に居ることを誰も知らないのだ。出来ることといえば、自分の治療力を信じて、傷ついた獣の

ようにじつとして、体力の温存を図ることだけだ。そう、眠ることだけだ。

その大事な眠りが、しばしば下痢で妨げられた。

意識が遠くなる。眠りなのか、気絶なのか。それとも『このまま死ぬのか』。

ふっと笑いが来た。可笑しかった。

死ぬために来たのに望むものを恐れてどうする。

——丸ノコの回転音が聞こえる。木材を刻む高い音に変わる。そのとき俺の目に、長い角材を持ってよろけながら傍を通るアルバイトの姿が映った。

「バカ、危ないったら、おい、学生！ 離れる学生！」

ほんの一瞬のことだった。顔中に血しぶきを浴び、あとから右の指先に激痛が走った。心臓の弾ける音が聞こえた。救急車のサイレンを聞いたのは、それからずつと経ってからのような気がする。

よそ見をして木材の切断を続けていた俺。

結局利き腕の、親指を除く四本の指を、第二関節から失った。

覚えていないのだが、俺は地べたを転がりながら、飛び散った指先を捜していたという。痛みに耐えかね、泣

きながら、何かを喚(わめ)きながら。

同僚は病院で同情を露(あら)わにしてそう言うのと、

「なあ壮太(そうた)、ミヤコってお前の彼女か。何度も何度も呼んでいたぞ」と俺の顔を覗いた。

——『ああ、宝(たから)だった』

腹がまた、グググルツと不気味に鳴り出した。

『もう過去形、だけどな』

布団を跳ね除(の)け、外の「トイレ」を目指して扉へと走り出す。と、その瞬間、足がもつれて前のめりに倒れた。

股間が生暖かくなってきたとき、京とは別の世界に心を移し、大声を出して嘲(わら)った。

外が明るくなってから目が覚めた。

どれくらい眠っていたかは分からない。素早く起き上がる力がないことは確かだ。それでも肛門の騒ぎは大分治まってきている。

ブリーフもズボンも汚してしまった俺は、直に半ズボンを身につけている。布団の中で自分の男をしっかりと

りと握ってみる。

京(みやこ)の女の髪(ひだ)の手触りを想う。一度も触れたことの無い柔肌の温もりを想う。

『抱きたかった。実際にこの手で』

この手で、指の欠けたこの手で？

飛び散って赤い斑点になった自分の血。血の雀斑(そばかす)をいまも洗い流せずにいるこの顔では、京の唇さえ奪えない。もう手紙もかけない。あなたが褒(ほめ)てくれた、好きだと言ってくれた、綺麗な文字が、一文も書けない。唯一残されていた糧を得る仕事、木工もできない。家具も家も造れなくなつた。

自分の歯で、強く唇を噛んでみる。まだ生きている証か、淡い塩気の、血液の味がした。

——「……壮太、あなたは言いましたね、目が色弱で大好きだった絵を捨てたって。それでも何かを創りたかったから高校を出てすぐに、木工の親方のもとに弟子入りしたって。それなのに、事故で指を失って、今度(こゝろ)は生きていくためのジョブを、昔の宮大工にも負けない仕事をしたいという夢を、捨てるって？……それってずるいよ、自分の能力に対する裏切りだよ。絵を見失

つたときに次の目標を立てたように、壮太なら今度もきつと何か見つける。京はあなたの、ぜつたい負けないっていう心の底力を信じているから、あなたが好きだから、同情なんかしない。いまずぐ飛んでいって一緒に泣きたいけれど、そんなこと、しちやあいけないんだ。そう思う。今度のお給料でノートパソコン買って贈る。だから、苦手だなんて言わないで、キーボードを心で叩いて、お便りをください。あなたの元気な声、待っています。

壮太の居るところから少し遠い長野から。みやこ

——『さすがペン。バルだよな。距離を置いたんだろ、

京。結局……』

そこから先は、口にははいけない。たとえ心の中だけの声でも。いま一番、いや、俺の人生で一番、言葉にしてはいけないことなのだ。

『やっぱり京だけは、最期まで信じていたい。そうでなくちゃ俺って、寂しすぎる』

水漬(みず)が鼻から垂れた。溢れ出た涙が、それに追いついて重なつた。

『……まだ生きてた』

枕もとのニリツトル入りのウーロン茶がカラになつていた。コツヘルの水も無い。タオルの水気も無かった。砂漠を歩いた後もこんな感じなのか。唇が乾ききつていて、上下で擦(こすり)り合わせるとザラツと音がした。胃も腸も空っぽ。空腹の音さえ出せないだろう。

不思議に想いが透き通つてきた。

小屋中に満たされた冷気すら俺の周りには寄つて来ない。そんな気がした。上半身を覆っていたウインドヤツケを摘まみ、中の匂いを嗅いでみる。鼻が曲がりそうで、顔を顰(しか)めた。

『百年の恋も興醒めだな』

心が嘲(あざわら)つたあとで『フン!』と言つた。

『女もいねーくせに』か。

のそのそと起き上がると、太腿(ふともも)から下を目掛けて寒さが襲つてきた。慌てて登山用のレッグウォーマーを穿(は)く。

両足の脹脛(ふくらはぎ)までが覆われた。入り口の扉が外の強い光で縁取られている。

予め目を細くしてから体ごと押してみた。

『……』

すでに日は高かつた。

下り傾斜の径(こみち)を挟んで、幹から梢(こずえ)に至るまで、全身を雪化粧した落葉樹が並んでいる。どこからか来た大型の野鳥が止まりきれずに、枝に積もつた雪に突っ込んだ。羽ばたきが削つた微細な雪片が柔らかな風に乗つて宙に舞う。葉も花もつけていない冬木立が、まるで満開の桜のように、その妖艶さを競っている。近いものは、陽光を受けて結晶を輝かせ、花ではなく雪であることを知らせてくる。波打つ白の濃淡の彼方にある空の色はどうだ。どこまでも均一な、耀(かがや)きに満ちたコバルトブルー。心で引き寄せれば、掴み取れる気がする。

——「満開の桜ってね、雪積む木って言うの。だけどこれ、桜をほめてるの? それとも雪? 壮太はどっちだと思ふ」

——『そういえば京みやこ、文学部出だつたつけな。桜を目の前にして言うんだつたら雪が格上(かくうえ)に決まつてるだろ』

俄か雨でこの小屋に一緒に避難したあるとき、確かワングル部のもう一人の女学生は桜だと言いつ張った。

傍らで微笑していたのが京。この子、頭も氣立てもいいとそう思った。「私は雪が格上だと思つ」と、言葉では無くても微笑ほほえみで知らせていたから。いま極上の景色を味わいながら、それは確信に変わった。

『花もなく葉つばもなく美しくなれる木々、か。そんな道もあるかもな』

京は俺にとつての雪。きょうのこの雪。

『だといいな。もう、遅いけど』

とりあえず水だ。脱水症状が出ていると自覚して、沢へと歩き出した。

とたんに、思わず苦笑した。

『何だ、生きようとしてるじゃん』

滑つては転び、吹き溜まりの雪に足を取られては前にのめつた。そのたびに自分の情けない格好を見て雪を叩き、大笑いをした。

『高熱も下痢も身体が勝手に治しちまつた』

もう失うものは何も無い。これを笑わないでどうする。顔色もかなり酷(ひど)いに違いない。たぶんムン

クの「叫び」状態だろう。

這いつくばつた後で立ち上がり、雪を払い落としていると、前方に人の氣配を感じた。幻を見た。いや、本当に人が見えて、目をこすつた。

「やつぱりここだったのね」

「みや、こ？」

一体何日声を出していなかったのだろう。久し振りの発声が、彼女の名、京だった。なぜここにいる。なぜ俺がここだと判つた。きつちりと山歩きの格好までして。出逢つたあの日と同じだ、山スカートの色まで。

「何しにここに来たのお：壮太」

近づきながら半ベソをかいているのが分かる。

胸が張り裂けそうになった。

言葉が口をついて出てこない。

「家電(いえでん)にかけた：家出したって、おかあさんが：どこにいるか捜してつて：泣いてた」

汚い自分の顔が、さらに歪んでいる。そんな馬鹿なことを、ゴトゴトと心音を大きくしながら思った。

「ここよね、すぐわかつた。わたしがいまの壮太なら、同じ発想をするもの」

立ち止まった、京。

近づけない俺。

「生きよ、一緒に、ね？」

そう言つてゆつくりとうなずく、京。この上もなく、
きれいだと思つた。

「……うん」

急に噴き出した涙で、京の顔が揺れた。

それが笑顔だと分かるまで、心も揺れていた。

立ちすくむ二人の間を、雪の子が風に乗って、騒ぎな
がら通り過ぎていった。